岩手・毛越寺（もうつうじ）跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字大沢地内

2　調査期間　一　一九八八年（昭63）七月、二　一九九〇年（平2）七月

3　発掘機関　平泉町教育委員会

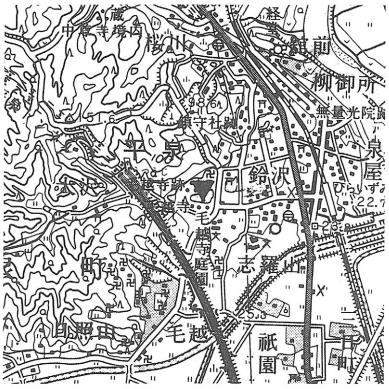
4　調査担当者　本澤慎輔・八重樫忠郎・菅原計二

5　遺跡の種類　寺院跡・庭園跡

6　遺跡の年代　一二世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

毛越寺跡は、JR平泉駅より約八〇〇m西に所在する。毛越寺は、一二世紀に平泉を拠点として繁栄した奥州藤原氏の二代基衡によって造営された。金堂円隆寺のほか、嘉勝寺・講堂・常行堂・法華堂・二階惣門・鐘楼・経蔵などの建物があったことが知られるが、嘉禄二年（一二二六）をはじめとする中世の火災で焼失したため、現存するものはない。しかし、北の塔山を背景として広がる土塁によって囲まれた境内には、円隆寺の前面の浄土庭園の大泉が池が残り、また建物もその礎石や基壇などの遺構が良好に保存されていた。発掘調査は、庭園の復元整備のため、一九八一年から一九九〇年まで平泉町教育委員会により実施された。



（一　関）

一　第一二次調査

第一二次調査は、大泉が池の西岸から南岸にかけての地区を対象とするものである。調査の結果、池南西岸で時期の異なる三条の排水溝が見つかり、ここが池尻であることがわかった。

木簡は、池底部の黒褐色土層から六点出土した。同層は有機物や自然木を多く含み、かわらけや複数の宝塔状木製品、蓮の実状の木製品などが出土している。

二　第一三次調査

第一三次調査は、中島を対象とするもので、その結果、中島には二時期の変遷があることが判明した。古い一期目の中島は、西北西から東南東に長い不整形で、平坦面・池岸とも表面に玉石を敷いている。二期目には島の東部が造り変えられる。すなわち、一期中島の北東地区の池岸玉石敷面を削り込んで細長く東方へ延びる半島状に成形し、そこから粘土と礫を積み重ねてさらに東方に島を細長く拡張して現在に見る勾玉状の形に造成されている。この新旧二時期はいずれも一二世紀に属する。

木簡は、中島の北橋跡地区の池底面直上から一点出土した。この他、中島の北東から東にかけての北辺の池底から、木製宝塔（部分）が一〇点出土している。これは二期中島に伴うと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

一　第一二次調査

(1)　□□（ウーン）（ウーン）（カ）　(82)×18×1　061

(2)　□（ウーン）　(50)×21×1　061

(3)　□（カーン）　(37)×(16)×1　061

(4)　□□（ビ）（カ）　(49)×20×1　061

(5)　□月（四カ）　(36)×(13)×1.5　081

(6)　□□□　(34)×(8)×1　081

(1)～(4)は笹塔婆の断片で、片面に墨書がある。墨書は梵字のみである。(1)(2)(4)は側面に切り込みが確認でき、頭部は圭頭状を呈すると思われる。(3)は欠失により原形不詳。(5)(6)は(1)～(4)よりも厚みがあり、笹塔婆ではないと思われる。

二　第一三次調査

(1)　□□□□（バン）南无カ　(13.5)×2.5×2　061

笹塔婆である。頭部は山形で、側面に切り込みはない。

9　関係文献

平泉町教育委員会『毛越寺庭園発掘調査報告書　第一二次調査』（岩手県平泉町文化財調査報告書一四、一九八九年）

同『毛越寺庭園発掘調査報告書　第一三次調査』（同二六、一九九一年）

（及川　司）

一(1)

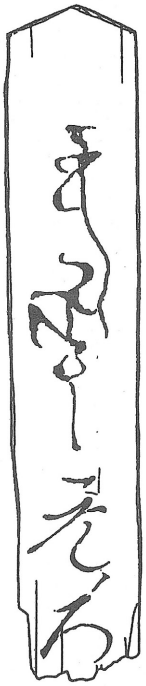
一(2)

一(5)

一(6)

一(3)

一(4)


二(1)